

## 中世文学にみる人間観(一)

——『宇治拾遺物語』について——

沼 波 政 保

一

まず『宇治拾遺物語』の話について、第一話からいくつかをみてみよう。

『宇治拾遺物語』の第一話は道命阿闍梨の話である。冒頭の道命の紹介に「色にふけりたる僧ありけり」と言うからどのような仏教的教訓話かと思えば、好色に対する教訓はない。末尾に「されば、はかなく、さい読みたてまつるとも、清くて読みたてまつるべき事なり」と一応の教訓を語ってはいるけれども、付け足しの感を否めず、しかも好色に対する戒めではない。和泉式部との情事にふけることはそれ自体破戒であるはずなのに、作者はそれを咎めることはない。また「五条の齋」に今宵経を拝聴した事はいくたび生れ変わっても忘れることはないと言われた道命は「法花経を読みたてまつる事は、常の事也。など、こよひしもいはるゝぞ」と問うが、道命は「五条の齋」

がなぜ今宵の読経だけを拜聴できたのか解っていない。和泉式部との情事の後に身を清めずに読経したことは、道命からいえば「常の事」なのであり、そのように道命に語らせる作者にも、道命の破戒に対して非難する気持ちはない。さらに、「五条の齋」に

清くて、読みまいらせ給時は、梵天、帝釈をはじめたてまつりて、聴聞させ給へば、翁などはちかづき参りて、うけ給るに及び候はず。こよひは御行水も候はで、読みたてまつらせ給へば、梵天、帝釈も御聴聞候はぬひまにて、翁、まいりよりて、うけたまはりさぶらひぬる事の、忘れがたく候也。

と答えられた後にも道命の反省の弁は語られていず、作者に、僧たるものは戒律を守り身を清く保つべきだということ考えはなく、道命に対して非難する思いはないのである。

第二話は、丹波国の篠村の平茸の話である。この平茸は「不浄説法」をしたゆえに法師が生まれ変わったものであると仲胤僧都の言を借りて語るが、作者に「不浄説法」を非難する気があるならば、この話の後に「不浄説法」をする僧の話が続々と登場させることはないはずである。ところが『宇治拾遺物語』には「不浄説法」をする僧が主人公となっている話が多いのである。しかも、それらの話において作者は「不浄説法」をする僧を咎めてはいない。さらに、平茸が夢に二、三十人の法師となって現われ、この土地を去る挨拶をする場面<sup>(2)</sup>で、

此法師原は、この年比候て、宮つかひよくして候つるが、この里の縁尽きて、いまはよそへまかりなんずる事の、かつはあはれにも候。

と語るが、長年「宮つかひよくし」たと言うところに、平茸となっていることを悪果と捉える意識は薄い。つまり、

この話は、平茸が夢に法師となって現われ、この土地を去る挨拶をし、その通りに翌年から平茸は一切生えなくなつたという、不思議な話なのであって、「不浄説法」をする僧は平茸に生まれ変わるといふ悪因悪果を説く話ではないのである。末尾に「されば、いかにもく、平茸は食はざらん、事かくまじき物なりとぞ」と語るが、これは、単に平茸は食べなくても差支へはなからうということを一般的に言うのではなく、「されば」とあるから直前を承けて、そのような「不浄説法」をした法師の生まれ変わった平茸を食べることに何となく危険を感じての教訓ではあろうが、ここに本話を語る目的があるのではなく、不思議なことに對する興味からこの話は語られているのである。すなわち、平茸に生まれた法師たちを非難する意図は全くないのである。

ところで、「不浄説法」については、新日本古典文学大系本（岩波書店）の脚注では「名利を求めて」する説法とし、新編日本古典文学全集本（小学館）の頭注でも「仏法のためにではなく、みずからの名利のために行なう不浄な目的・動機による説法」とする。諸注おおむね同様であり、また妥当であると考えるが、第一話の道命阿闍梨の話に続けている点から考えれば、作者は旧日本古典文学大系本（岩波書店）の頭注に言う「肉食女犯の不浄の身で人に説法する」という意味に理解していたと思われる。しかしまた作者は、この話は「説法する法師」のことであって、「経を目出く読」む道命とは微妙にずらして、道命を非難することにはならないようにしている点、作者の細かい配慮をうかがうことができるのである。

第三話は、いわゆる「瘤取り爺さん」の話である。鬼が酒を飲み遊ぶ様子について「この世の人のする定なり」と語り、また酒に酔ってだらしなく乱れる鬼の様子を「たゞ、この世の人のごとし」と語るところからも、鬼がこ

の世にあらざる存在であるという意識よりも人間と同じような存在とみていることがわかる。さて翁が鬼の前に踊り出るところの描写、

この翁、ものの付たりけるにや、又、しかるべく神仏の思はせ給けるにや、「あはれ、走出て舞はばや」と思ふを、一度は思かへしつ。それに、何となく、鬼どもがうちあげたる拍子のよげに聞こえければ、「さもあれ、たゞはしりいでて、舞てん。死なばさてありなん」と思とりて、木のうつほより、烏帽子は鼻にたれかけたる翁の、腰によきといふ木きる物さして、横座の鬼の居たる前におどり出たり。

や、翁が舞う様子の描写、

翁、のびあがり、かゞまりて、舞べきかぎり、すぢりもぢり、えい声を出して、一庭を走まはり舞ふ。

では、人間の心理をみごとに描いており、その時の翁の姿を彷彿とさせる。末尾には「物うらやみは、すまじき事なりとぞ」と教訓めいた一文で結んでいるが、この話は羨む心を戒めるものではなく瘤を鬼にとられた珍奇なことや、羨む心を持ったがために逆に瘤をもらってしまった隣の翁の不幸を、面白おかしく語るものである。しかも鬼の前に踊り出た翁はもちろん、瘤をもらってしまった隣の翁に対しても非難めいた表現はなく、むしろ、どうしようもない人間の心を暖かくみつめ、肯定的に捉えているのである。

第四話は伴大納言の話である。話自体は夢見であり、善男が夢見の通り大納言に上ったが夢をよしなき人に語ったがために罪を被り失脚した話である。しかし夢を聞いた善男の妻が、西大寺と東大寺とを踏まえて立っているという夢の内容に対して「そのまたこそ、裂かれんずらめ」と言い、郡司の饗応に対して善男が「我をすかしのほ

せて、妻のいひつるやうに、またなど裂かんずるやらん」と恐れ思うところに、卑猥ではなく人間の明るいおかしさが表われている。

第五話は随求陀羅尼を額に籠めた法師の話である。額に傷のある法師が物々しくやってきて、寄進を請う。そして額の傷のわけを問われた法師は、これは額を破って随求陀羅尼を籠めたのだと言うが、実は間男をして女の夫にうち割られた傷だったことが露見するわけである。しかし事の真相が露見した法師は、人々の驚き呆れた視線の中で、「さも、ことと思たる気色もせず」、少し真面目くさった顔で「その次にこめたるぞ」と平気な顔で答えるのである。この、少しも恥じる気配を見せず、堂々と開き直った態度のしたたかさとその物言いの見事さに、人々はこの法師を咎めるのではなく、「あつまれる人ども、一度に、『は』と笑」ったのである。そこには、とんでもないこの法師を非難する気持ちはなく、人間としてのおかしさが語られていると言えるのである。そしてその法師は、その爆笑の「まぎれに逃てい」ってしまったのであるが、冒頭の物々しい登場の仕方との落差がまたおかしさを増している。つまり、この話も、法師が法師にあらざる行為をしたということではなく、法師云々ではなく一人の人間としてのおかしさが、明るくおおらかに語られているのである。

第六話は「法師の玉莖検知」の話である。下品極まりない話ではあるが、「煩惱を切すて、ひとへにこのたび、生死のさかひを出なんと思と」るために一物を切り捨てたという僧の話が嘘だと判明した時（もちろん、判明するに至った経緯もおかしさの対象ではあるが）、「中納言をはじめて、そこらつどひたる物ども、もろ声に笑」い、「聖も、手をうちて、ふしまろび笑」ったのであって、末尾に「狂惑の法師にてありける」とはあるものの、これ

は一応の言葉であって、話自体の卑猥さも含めて、この僧に対しての批判よりも、明るくおおらかな人間がそこには描かれているのである。

第七話は、わが命を犠牲にしてまでも獵師に殺生を止めさせようとする龍門聖と、それによって発心した獵師の話である。この話はいわゆる発心譚であり、純粋な仏教説話であると言えよう。しかし、一般的な仏教説話の末尾に多くみられる仏教的教訓は語られていない。

第八話は、易の占いによって自分の死後の娘の様子を知り、娘の将来のために配慮した親と、その通りに占いをよくする旅人が来て金を占い出したという話である。この話は、末尾に「易の卜は行すゑを掌の中のやうにさして、知る事にてありける也」とあるように易の不思議さを語る話であるが、かすかながら、親が子の性格をよく知って先々のことを考えたという、子を思う親心の実態を語ってもある。

第九話は心誉僧正の験力のすばらしさを説く仏教説話であり、末尾に「心誉僧正、いみじかりけるとか」と僧正の験力を評価してはいるが、そういう立派な人物がいたというだけのこと、仏教的教訓はない。しかも、この話は、心誉僧正が参上する前に護法童子が参上して病を直したという点、それほど心誉僧正の験力が強かったということであることは理解しながらも、享受する立場から言えば、どうしてもこの点に不思議さを感じてしまう話である。

さて、第七話・第九話は仏教説話であり、第八話は易の不思議さを語る話であったわけだが、第一話から第六話まではこの世の中の様々な人間およびその心理を肯定的に語っている。この流れの中でみれば、第七・八・九話も、

この世の中にはこのように自己犠牲を厭わない尊い聖もいれば、即座に我が身の罪深さを悟って発心出家する者もおり、自分の死後までも子を思いやる親もいるし、不思議なこともあるという、この世の中のありのままのすがたを語るものであるとも受け取れるのである。

第一〇話は藤原通俊に自分の歌を批判された秦兼久が反論したという話である。通俊に歌を批判された兼久が「此殿は、大かた、歌のありさま知り給はぬにこそ。かゝる人の撰集うけ給ておはするは、あさましき事かな」とか「かゝる人の、撰集うけたまはりてえらび給、あさましき事也」と口を極めて、憤懣やる方ない気持ちを抑えきれずに反論する様子、また、それによって専門家ぶって批判した立場を見事に潰された通俊の「うちうなづきて、『さりけり、く。物ないひそ』とぞ、い」ったという、自らの失敗を恥じ入りなるべく小さいままで事を終わらせようと心理が、如実に語られている。どちらも人間らしさの溢れるすがたであり、しかもそのようなすがたを非難しているのではなく、人間の心理をそのまま肯定的に語っているのである。さらに通俊は和歌の上手であるが、その通俊の失態を批判するのではなく、誤りを突かれた際の一人の人間の対応をよくありがちなこととして肯定的に語っているのである。また、この話はここまでの話とは異なり、貴族文化とも言うべき和歌の評価についての内容になっているが、この点について日本古典文学全集本（小学館）の「解説」に

『宇治拾遺』も中世期の作品である以上、一方に庶民的、土俗的な語調を強めると共に、また公家的なみやびの伝統にもあこがれを寄せる、そういう対立的な様相を呈している。……（中略）……『宇治拾遺』が中世的な地方性、庶民性を吸いあげると共に、またこの貴族的なみやびの道統に立って、人間理解の軸とする方式も

見落とされてはならない。(二六〇七頁)

と述べられているが、「貴族的なみやび」に立った話題の中においても人間性を肯定的に捉えているのである。

第一一話は一生不犯の僧が実は俗人と同じことをしていたという話である。僧が卑猥な事を真面目に悩み、ふるえ声で尋ねたので「諸人、をとがひを放ちて、笑」い、一人の侍の質問に対する僧の返答に「大かた、どよみあ」つたとあって、卑猥なイメージはなく人間を明るくおおらかに語っている。しかもこの僧を非難するニュアンスはなく、それどころかどこまでも真面目で、それがほほえましくさえも思われる人間として描いている。つまり、おおらかに明るい人々、そして卑猥な事に対しても真面目に悩み、真面目に受け答えし、挙句、僧も笑われて気まずくなつたのか、例のごとく「其紛に、はやう逃」げてしまったという、好感を覚える人間を肯定的に語っているのである。

第二二話は「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」である。稚児が、子供なりに思慮をめぐらし、その結果どうしようもなくなって間の抜けた時に返事をする。いかにも子供らしい姿が活写されている。

第三話は田舎出身の稚児が桜の散るのを見て泣く話である。桜が散ることに對する僧と稚児の認識の違いが面白いが、僧の思いも稚児の思いもともとで、前に引用した

一方に庶民的、土俗的な語調を強めると共に、また公家的なみやびの伝統にもあこがれを寄せる、そういう対立的な様相を呈している。

という『宇治拾遺物語』の人間理解の特徴が表われている。末尾の「うたてしやな」というのは僧の、つまり貴族



社会の美意識であって、その美意識からがっかりしただけのことであって、稚児を非難するものではない。両者の思いが一致しないところに面白さがあるわけだが、稚児の思いはそれはそれで当然であり、両者共にそれでよいわけ、人間を肯定的に語っているのである。

第一四話は威張りちらしている小藤太が婿のあられない姿にひっくり返り目をまわす話である。内容は卑猥極まりないものであるが、あられない姿になっていた婿の行為も夫婦の素直な感情の結果であり、婿を思いやる小藤太の気持ちもまた好感が持てる。結局、小藤太の善意と婿の錯覚から起こった面白さにこの話の中心はあるのだが、そこには、人間というものはどうしようもないと言いながらも苦笑する作者がうかがえ、そのような人間を批判しているのでは決してなく、肯定的に捉えているのである。

第一五話は鮭を盗んだ大童子が開き直る話である。盗んでもしらを切り、化けの皮をはがされると開き直って下品な駄洒落を言う、その大童子のしたたかさ。しかも「そこら、立どまりて見ける物ども、一度に『はっ』と笑ひけるとか」で話を終えていて、大童子に対する非難めいたところはなく、大童子のしたたかさが肯定的に語られている。

## 二

以上、『宇治拾遺物語』の冒頭から十五話についてみてきた。冗長になるのでこのあたりで止めるが、『宇治拾遺

物語』にはこのような話が非常に多い。<sup>(9)</sup>そしてそこに登場する人々も極めて様々な人間である。高貴な身分の人もいれば、名もない卑しい人間もいる。裕福な人間もいれば極貧の者もいる。知識教養のある人もいれば、無知蒙昧の者もいる。文字通り様々な人間が登場しているのである。そしてその人々は、また様々なことをしでかす。身を清めることもせずして読経した道命、平茸に生まれ変わった法師たち、ちょっと欲を出したばかりにさらに瘤をもらってしまった翁、夢をおかしな風に解釈し真面目に悩む伴善男とその妻、偽りで尊崇を得ようとすると、随求陀羅尼を額に籠めたと称する法師や「玉莖検知」の僧や一生不犯と称する僧、我が身を顧みず殺生を止めさせようとした龍門聖とそれによって出家した男、すばらしい験力を持った心誓僧正、和歌を難じられて憤る兼久と自身の誤りに小さくなる通俊、子供らしくほえましい「カイ餅」の稚児、お互いの思いが異なったために興ざめた比叡の僧と稚児、同じくお互いの思いが異なったために卒倒した小藤太とその婿、盗みが発覚しても堂々と開き直った鮭を盗んだ大童子など、文字通り様々な人間が語られているのである。また、法師が平茸に生まれ変わり、しかもその法師たちが夢で別れを述べたり、鬼が集まり酒宴をしたり、易占が正確無比であったり、僧正が参上する前に護法童子が駆け付けて病を直したりといった不思議な、珍奇な、もしくは驚嘆すべきことも、そのことによって何かの教訓を得ようというのではなく、様々な人間の生きるこの世界にはありえないような様々なことも起こるということ、ありのままに語っているのである。

すなわち、『宇治拾遺物語』には様々な話が語られており、さまざまな人間が登場するが、それらの人間に対して、作者は決して批判的視点から語ってはいないことは、前章でみたとおりである。立派な人物や真面目な人物に

対しては当然ながら、人の道にはずれるような行為をした人物に対しても、また卑猥な言動をした人物に対しても、それも人間のすがたなのだという観点から、ありのままの人間のすがたを肯定的に語っているのである。要領よくずるがしい人間も、ドジで間抜けな人間も、事に遭遇した時の人々の心理の見事な描写と併せて、明るくおおらかに語っているのである。そこには、人々のしたたかなまでに生命力の溢れた生き様が活写されている。そしてその視点は、不思議な、珍奇な、もしくは驚嘆すべきことについても、そのことによって何かの教訓を得ようというのではなく、様々な人間の生きるこの世界にはありえないような様々なことも起こるということを、ありのままに語ろうとしているのである。

もちろんこのことは、必ずしも話の意図だけに限定されるものではない。時には話の意図とはずれたところにおいても、人間のありのままのすがたを肯定的に語ろうとする視点をみることができ。例えば第一話において、道命の読経を普段はなかなか聴けない「五条の斎」が聴き、そのわけを道命に語ったという不思議なことがあったというところに話の意図はあるが、「色にふけりたる僧」であって和泉式部との情事にふけり、しかも身を清めることもなく読経し、そのことを問題として全く意識していない道命に対して、作者は批判することなく一人の人間のがたとして語っている。つまり、話の意図はさておいて、そこに登場する人物たちの心の動きに人間らしいものを見ることができるとも多いためである。

また、時には末尾に教訓めいた一文がついている話もあるが、その多くは付け足しの感を否めず、話の中心はそこにはなく、あくまでも人間のすがたにあるのである。例えば、第三話は末尾に「物うらやみは、すまじき事なり

とぞ」とは言うが、この話はそのような教訓を説くものではなく、癩を鬼に取られた珍奇な点とともに、二人の翁の人間らしいすがたにこの話の中心があることは、前章でふれたところである。

もちろん、『宇治拾遺物語』所収のすべての話がそのような話であるわけではない。中には、純粋な仏教説話である話があれば、道徳的もしくは倫理的教訓を説く話もある。しかし、そのような話は少なく、しかもそのような話であっても、登場する人物の描写にはやはり人間を肯定的に捉えていることがうかがえるのである。また、仏教説話であっても、仏教の教えの有り難さとか、仏教的教訓を説くのではなく、そういう不思議なことがこの世にはあるのだということを語っているのである。

すなわち、『宇治拾遺物語』は、人間に対してその言動を批判したり非難することはなく、人間のありのままのすがたを肯定的に語っているのである。否、その人間への姿勢は肯定的というよりも好意的といふべきものであり、そこには人間へ注がれる暖かい眼差しさえも感じられるのである。作者は、人間のありのままのすがたに、時には驚き、時には感嘆し、時には苦笑しつつ、人間をおおらかにみつめ、これが人間なのだ人間をすべてを認めているのである。『宇治拾遺物語』の人間観はこのように捉えることができるのである。

旧日本古典文学大系本(岩波書店)の「解説」には、

集められた説話のかけに、一人の「創作主体」ともいふべきものを設定せずにはいられなくなるような発想法がとられていて、そこに一種独特の文学のにおいがある——このような編者の発想の秘密を解くところに、文学としての「宇治拾遺」をとらえる手がかりがあり、その作品としての特色や意義も明らかにされると考えて

いる。(一九頁)

と述べられた上で「その点に関して、心づいたこと」として三点を挙げておられるが、その第三として、次のように述べられている。

重要な、そして最も内奥的な発想法の秘密は、多くの出典の中から説話を選択・採録し、口がたりを聞きとめて編成・叙述したその全体構造の中に、おのずからにじみ出ている編者の人間理解の独自性に見出すことができると思う。すでに説かれてるように、「宇治拾遺」には教訓や啓蒙の意識はうすく、興味中心に説話が集められており、笑いやおかしみの要素が目立つが、それらは、「今昔物語」の持つような鮮烈さを持たず、極めてゆるやかであり、おおらかである。……(中略)……「今昔」編者の持っていたあくまで眞摯な、探求的・蒐集的意欲は、「宇治拾遺」には全く見られない。「宇治拾遺」の説話は、事件中心というよりは人間中心であり、編者の眼光は常に作中人物の上におだやかにそがれている観がある。「宇治拾遺」の編者は、さまざまの人間に深い興味をよせ、いわば寛容に人間を理解する。……(中略)……いずれも愚かしい人間の演じた言行を淡々と叙述して、それらの人間像を的確にとらえているが、そうした説話発想が成立した背後には、寛容な人間理解の上に立った容認の態度があるといつてよい。

「宇治拾遺」にも、まれには峻厳な求道者の話も、苛烈な奇異の物語もある。しかし全体として「宇治拾遺」の中軸をなす発想法は、もっと深々と日常性につながる平凡な事件の中に人間を見ることであり、人間の弱さに対する容認と一種のあきらめの気分のただようさ中にある。(二二～四頁)

「一種のあきらめの気分」とあるところは同調しがたいが、『宇治拾遺物語』の人間観を的確に述べておられ、私も全く同感である。

さて、『宇治拾遺物語』の人間観について考えてきたわけであるが、『宇治拾遺物語』が成立したのは鎌倉時代初期である。ところが、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては一大変革期であった。永遠に続くと思われていた貴族社会が崩壊に向かい、替わって武士が抬頭し、それに伴って荘園制度も崩れ、来る日も来る日も戦乱に明け暮れ、それまでの価値観も大きく変化して行った。そのような時代の中で、特に貴族階級を中心に人々は無常を身に迫って経験した結果、この世を末世と捉え、常なるものを願って極楽往生を求めた。そして、このような時代を反映して、この時代の文学作品の多くは暗く厳しい内容のものであった。そのような中において、この『宇治拾遺物語』の人間観のおおらかな明るさはどうしたものであろうか。この点について、やはり旧日本古典文学大系本の「解説」では、次のように述べられている。

歴史の変革期の中ではげしくゆり動かされ、極度の緊張の中に安穏な日とともないような時代を、「平家物語」や「方丈記」の筆者は、それぞれの方法で受けとめ作品化した。治承・寿永の大きな歴史の変革の時期を通じて、人間は個人としても集団としても、劇しくゆり動かされ、一日も安き日はなかったかのように描かれている。喜びにつけ、悲しみにつけ、極度な緊張が要求され、日常的なものは、切り捨てられようときえしている。「宇治拾遺」所収の説話世界は、それとはほぼ同じ時代には成立しており、また伝承されつづけていたわけであるが、「宇治拾遺」の編者のとらえたものは、そのようなげしい時代の変転の相ではなかった。そこには

「宇治拾遺」の「弱さ」があるといえよう。

しかし、「宇治拾遺」の文学の方法は、この切り捨てられたものにつながっている。人間の運命や境遇を大きく変える変革と激動の時期においても、一面において、人間の日常性の実感感覚というものは、実は必ずしも大きく変らない。この側面をすくい上げたのが「宇治拾遺」の編者であり、人間とは結局このようなものなのだとする寛容の態度と静観の姿勢で、一種あきらめにも似た健康な笑いの世界を形成しているといつてよい。そして、そのような感情は、いつの時代においても、生活の深部において、庶民の感情や感覚につながる。編者は、貴族階級に属する人であったかも知れないが、多くの民話やゆたかな口誦伝承をとりあげることができたのも、彼のそのような人間理解の態度があったればこそであると考ええる。(二四〜五頁)

『平家物語』や『方丈記』に対する『宇治拾遺物語』の違いが的確に捉えられているが、まさに『宇治拾遺物語』は、いつの時代にあっても変わることはない人間性に暖かい眼を注いでいるのである。

それでは、『宇治拾遺物語』の作者はなぜこのような眼を持つことができたのであろうか。今、この疑問に対する答えを持ち合わせてはいないが、同じような人間観を持つ作品について考えあわせることによって、わずかなりともこの疑問に迫ってみたいのである。

三

人間のすべてを肯定的に捉え、しかもそうした人間を暖かい眼差しでみつめるといふ『宇治拾遺物語』の人間観と同じような人間観に立つ作品として、『徒然草』がある。それでは『徒然草』はいかなる人間観を持っているのか。この点についてはかつて考察したことがあるので、今は要約して記す。

『徒然草』<sup>(3)</sup>には、いわゆる高僧を高僧として扱わないところがみうけられたり(第百五十二段等)、僧の滑稽もしくは愚劣なことを語って笑いを誘う話がある(第五十二・五十三・六十・百六段等)が、しかし、出家者への尊敬を失わせるようなこれらの話は、ただ滑稽な笑いだけで終ってはいない。面白いことにはちがいないが、そこには、出家者が世俗的な状況の中で生きる自由なすがたが捉えられているのであり、出家者といえども人間であるという考え方がみられるのである。つまり、高僧の否定はすなわち人間性の肯定なのである。出家者について特別なものを認めていないのである。より一途な遁世ではなく、出家者にも人間性を認め、精神的自由を認めようとするのである。このようにみると、出家遁世について一方では一途なものを説き(第五十八・五十九・七十四・百十二段等)、一方では許容を説く(第五十八段後半・第百四十二段等)、一見矛盾したものも、決して矛盾ではなく、第一段の増賀ひじりについて述べた部分や第四・三十九段からもわかるように、決してひたむきにならない、余裕をもった態度であるといえよう。



また、兼好は無常が切迫したものであることを厳しく説く（第四十九・七十四・百五十五段等）が、傍観者のにみえることも否めない。しかしそれは、出家者としての人間的自由の結果であって、決して兼好が傍観者ののではない。兼好は生まれた時からすでに動乱の世であり、無常の世であった。ゆえに彼は、動乱をこの世に当然あるものとしてみつめることができ、生まれた時から当然この世は無常であると受けとめることができた。そのように冷静に無常をみつめることができた結果、現実の俗世間のみは無常があるのではなく、出家の世界にも無常はあることを認識できた。この両方の世界の無常を認識するところに、彼の無常観の特色がある。つまり、兼好の無常観は出家の世界と俗世との区別がなく、無常は人間すべてにあるのだという認識である。第三百三十七段の後半では、世を背ける草の庵には、閑に木石をもてあそびて、これを余所に聞くと思へるは、いとはかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき競ひ来らざらんや。その死にのぞめること軍の陣に進めるに同じ。

と述べている。兼好は、遁世の身にも無常の風は吹き来たることを体験的に知り、無常から逃避するための遁世が何の益ともなりえないことを認識した結果、無常を無常として冷静に眺める余裕を持つことができたのであり、従って、それまでの遁世のような真摯な、悪くいえば遁世にしがみつく態度が生まれ出ないのも当然であろう。すなわち、無常の自覚をふまえてののびやかさが余裕となつているといえよう。

さて、『徒然草』の中で求道精神を説く章段や無常について述べる章段では、その行間に「己れを知る」という考えが滲み出ている。すなわち、命終わる大事今ここに来たれりと確かに知ること、無常のしのび寄っている自分を、眼をそむけるのではなく、はっきりとみつめ知ることである。そこから生まれ出るものは、人間性肯定である。

第九十三段においては、無常をみつめることから遁世するのではなく、無常なる身であるがゆえにその生を愛し生を樂しむべきだと言う。

されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この樂しびを忘れて、いたづがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危ふく他の財を貪るには、志、満つ事なし。生ける間生を樂しまずして、死に臨みて死を恐れれば、この理あるべからず。人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るるなり。

無常を知ればこそ、そのような我身を知り、それゆえに生を樂しまねばならないというこの考え方に、無常觀から来た人間性肯定をみるのである。すなわち、無常觀という人間否定の考えから、だからこそ人間を肯定すべきであるという、否定をふまえての肯定の論理であるといえよう。そして、この人間性肯定の考えは出家者も例外とするものではない。第四十七・八十四・百六段等のように、出家者の世俗的な面に人間性を捉える点に、出家者も例外ではないという兼好の考えがみられるのである。

兼好は、無常は聖俗両者共に逃れられないものであるという認識によって、その無常の中で人間性を肯定する考へへと進んだのである。そして人間性を肯定する生き方とは、「ひたふる」ではない、心に余裕を持った生き方であると認識するに至ったのである。『徒然草』の中で遁世觀をはじめ種々の点において兼好の考えの矛盾がみられるのも、実は矛盾ではなく、それは人間性肯定の表出であり、「ひたふる」でない生き方をめざした結果にはかならないのである。

すなわち、兼好は矛盾に満ちた人間性を認め、その人間性を肯定する立場に立って、既成の概念に囚われることのない、「ひたふる」でない、精神的に自由な生き方を求めたのであった。

このような兼好の考え方が象徴的に表われているのが第四十段である。この段において兼好は、「米のたぐひ」を食べるのが尋常の姿であるのに対してそのような社会常識に囚われることなく生きる娘の姿に、精神的自由をみたのである。それは兼好にとって、とりもなおさず、人間らしい生き方でもあった。この精神的に自由な生き方に兼好は心ひかれたのである。

さて、『徒然草』において兼好は、矛盾に満ちた人間性を認め、その人間性を肯定する立場に立って、「ひたふる」でない、精神的に自由な生き方を求めたのであったが、このような考えに至ったには、兼好の無常への深い思索があったのである。つまり、兼好の人間性肯定・精神的自由という考えの根底には無常観が存在するのである。換言すれば、無常観の上に立って人間性が肯定され、精神的自由な生き方が求められたのである。

このような『徒然草』の人間観は、人間のありのままの姿を肯定的に捉え、明るくおおらかに語る『宇治拾遺物語』の人間観と非常に似通っている。先に、『宇治拾遺物語』の人間観について、作者はなぜこのような眼を持つことができたのであろうかという疑問を呈したが、『徒然草』の人間観が、兼好独自の無常観、すなわち、無常は聖俗両者に共に逃れられないものであるという認識を出発点として得られたものであることから考えると、『宇治拾遺物語』の作者も、兼好と同様な無常の認識を持ち、同じような思考過程を経て、『徒然草』と同じような人間観を持つに至ったのではないかと推測するのである。

もちろん、『宇治拾遺物語』は『徒然草』よりはるかに先行するのであり、『宇治拾遺物語』の成立時期は『徒然草』の成立時期と隔たっており、従って同じ中世といっても時代状況が異なることは言うまでもないことである。さらに『宇治拾遺物語』はその無常観を真正面から具体的に語ってはいない。よって、『宇治拾遺物語』の人間観が『徒然草』のそれと非常に似通っているからといって、そのような人間観を持つに至った過程までも同様に考えようとするのは、無理を通り越して無謀といえよう。先に、この点に対する答えを今は持ち合わせていないと述べた通りである。今は、『宇治拾遺物語』の人間観が『徒然草』のそれと非常に似通っていることを確認し、『徒然草』において兼好がそのような人間観を持つに至った過程を確認するにとどめておくこととする。

#### 四

次に、『平家物語』の人間観について考察し、『宇治拾遺物語』の人間観と比較してみたい。『平家物語』についてもかつていくつかの視点から考察したことがあるので、やはり要約して述べる。

##### 『平家物語』冒頭の一文

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはず。おこれる人も久しからず、只春の夜の夢の如し。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。(卷一・「祇園精舎」)

には、『平家物語』の語ろうとする無常観をみることができるが、ここに語られている無常観はいわゆる一般的な

「常なるものは何一つ存在しない」といった単純なものではない。それは「盛者必衰」の句の出典たる『仁王経』護国品にみえる章句の語るところ、すなわち、在ると思われるものも実は無いのであり、ただ在るように見えるだけである、従って、この世に在る（と思われる）ものが滅び無くなるのは必然である、というものである。そのことは「春の夜の夢」「風の前の塵」という比喩が何よりも物語っている。『平家物語』の無常観をこのように捉えうる時、以下の清盛をはじめとする多くの人々の「生」およびその先の「死」は、その実証の姿であると言える。また、同じく「祇園精舎」の章の「おごれる人も久しからず」「たけき者も遂にはほろびぬ」と語ることは、『平家物語』が因果応報を語るものではもちろんなく、また単に平家一門の衰亡を語るだけのものでもない。つまり、あれほどの栄華を極め、到底滅びそうにもなかった平家でさえ滅びた、まして名もなく力もない多くの人々は当然のことながら滅び去るしかなかったという、広く人間全体に普遍した無常を『平家物語』は語ろうとするものであることを意味するのである。

しかし、ならば『平家物語』は「祇園精舎」の章で無常の「ことはり」を語り、以下、多くの人々の死（へ至るすがた）を語ることによってそれを実証しただけの、つまり、無常の「ことはり」を語るだけのものなのか。

ここで注目しなければならないことは、広く人間全体に普遍した無常を語る『平家物語』を語ろうとした者、つまり作者だが（これは『平家物語』成立時における具体的な作者ではなく、物語を通してうかがいうる作者である）、作者も人間であるということである。この観点に立って考えるとき、いかに「有本自無」「都如幻居」と理解しようとも、その無常の「ことはり」通りに滅んでいった、自分と同じ数限りない人間たちを、「ことはり」の実

証のすがたとして冷徹に語り進めることができるものであろうか。そこには何らかの感情が働くのが自然であろう。新中納言「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長をめして、「いかに、約束はたがうまじきか」との給へば、「子細にや及候」と、中納言に鎧二領きせ奉り、我身も鎧二領きて、手をとりにく(ン)で海にぞ入にける。是を見て、侍ども廿餘人をくれたてまつらじと、手に手をとりにくんで、

一所にしづみけり。(卷十一・「内侍所都入」)

源平最後の合戦、壇の浦合戦での、平家の運命を悟った新中納言平知盛の入水の場面である。死に臨んでの「見るべき程の事は見つ」という一科白は、生を生き切った満足感に満ち溢れ、武勇に優れているとともに平家の運命を悟った沈着冷静な人としての知盛を語って見事とまで言えよう。しかしこの「見るべき程の事は見つ」という科白は、その裏にそのように言わなくてはならない無念さがあると見えよう。だが、『平家物語』は、「生」を生き切った満足感をもつての「死」として語る。それは、その無念さが理解できるだけに、作者は逆に満足感をもつての「死」として語りたい、語らずにはおれなかつたのである。ここに、作者の、単に冷徹に無常の「ことほり」の実証としての「死」を語るだけではないすがたを垣間見るのである。事実、滅びについて『平家物語』は、多くの場合、「あはれ」の語をもつて語っている。『平家物語』で用いられる「あはれ」の語は、悲哀感を表わすとともに、一つの美を感じ、つまり感動をもつて用いられているのである。

『平家物語』における「死」は、序章たる「祇園精舎」において語る無常観という「ことほり」の実証には、もはやとどまっていない。そこには、死んでいった多くの人々に対して、同じ人間としての暖かい眼差しを感じとる

ことができるのである。

さて、序章たる「祇園精舎」の章が導いた無常の「ことはり」の実証としての平家一門の衰亡は、卷十二「六代被斬」の「それよりしてこそ平家の子孫はながく絶えにけれ」で結ばれるが、その後には置かれた「灌頂巻」はまさに『平家物語』十二卷を受け止めていると言えよう。しかもその「女院出家」から「大原入」・「大原御幸」・「六道之沙汰」・「女院死去」にいたる建礼門院の物語は、『平家物語』十二卷の縮図的性格を有するとも言える。

なぜ「灌頂巻」が別立されたのか。「灌頂巻」の内容は、平家ただ一人の生き残りと言ってよい女院が出家し、「大原御幸」では、平家を滅ぼした張本人ともいうべき後白河法皇と、滅ぼされた側の生き残りの女院、それはまさに仇同士と言ってもよい両者を出会わせる。女院はみずからの一生を六道輪廻に例えて語る。もはや女院には恨みはない。誰が悪いわけでもない。平家が滅んだのは無常の波ゆえである。そして女院は極楽に往生し、救われたのである。この女院の往生は、ここまで語られてきた多くの「死」に対して悲哀感や同情・共感を味わわされてきた享受者（も同じく人間である）の、どうしようもないやりきれなさを、安堵感へと導くものである。

「灌頂巻」の内容をこのように捉える時、「灌頂巻」はまさに平家一門の人々の滅罪と鎮魂の意味において別立されたと言いうる。冒頭の「祇園精舎」の章において「ことはり」を語り、そして末尾に「灌頂巻」を置く。これは『平家物語』が単に「諸行無常」・「盛者必衰」の「ことはり」を語ろうとしているのではなく、そのような無常の波の大きな流れに対して、懸命に抗いながらも、結局はその波に吞み込まれてしまった数限りない人間に対して、限らないとおしさを感じ、同じ人間としてその魂を慰めようとする鎮魂歌であると言ってよいのではな

いか。もちろんその対象は平家の人々ではある。しかしそこには、あれほどの権力を握り、無常の波など克服できそうにさえ思われた平家の人々でさえも、結局は滅びていった、まして、名もなく力もない多くの人間は言うまでもなく滅び去るしかなかったという、すべての人間に普遍した無常を語っているのである。

すなわち、『平家物語』の語るものは、「祇園精舎」の章において語られる無常の「ことほり」の実証であると同時に、単にそこにとどまらず、同じ人間としてその「死」(滅び)を悲哀感をもってみつめ、その死んでいった人々の暖かい眼差しを語るものであり、しかもこれは、広く人間全体に普遍したものであるのである。

そして、このような『平家物語』の人間への眼差しは、何度もくりかえしたように、冒頭の「祇園精舎」の章に語られる無常観、つまり、すべての人間の無常を認識した上での、そのような無常の存在である人間への暖かい同情・共感にあるのである。換言すれば、無常の「ことほり」の前にまったく為す術もなく滅んでいった数限りない人間への暖かい同情・共感は、「諸行無常」「盛者必衰」という無常観から生まれているものである。つまり、『平家物語』は、無常観によって人間を捉え、「死」に懸命に抗いながらも滅んでいった人間への暖かい同情・共感の念を語るものである。

さて、この『平家物語』における人間への暖かい眼差しは、『宇治拾遺物語』の人間観に共通する面を持っている。『宇治拾遺物語』も様々な人間を肯定的に捉え、どうしようもない人間に対しても決して批判的にみるのではなく、時には苦笑しつつも、暖かく見守っている。もちろん、おなじように暖かい眼差しで人間をみつめているといっても、『平家物語』の人間観は、人間を必ず死を迎えるはかない存在として捉え、その死が必ず訪れることを



承知しながらも懸命に生きようとすがたに對する同情・共感であり、一方『宇治拾遺物語』の人間観は、この世に様々な人間が存在することを認識し、それぞれが人間の生き様であつていづれをも否定できるものではなく、その様々な生き様がそれぞれ人間の生き様なのだといふ観点に立つてのものであつて、両者は似て非なるものと言わざるをえないかもしれない。先に引用した旧日本文学大系本の「解説」においても述べられていた(二四―五頁)ように、確かに、『平家物語』や『方丈記』と『宇治拾遺物語』とはその意図や内容・方法において大きな隔たりにある。

しかし、『宇治拾遺物語』の作者も、直接的に語らないだけであつて、無常観を持っていたことはいうまでもないだろう。ということは、『宇治拾遺物語』の作者もまた、人間にも必ず死が訪れることは百も承知であつたはずである。つまり、『宇治拾遺物語』の作者も、みずからみづめ語っている人々もやがて死を迎える存在であることを承知した上で、この世における人間のありのままのすがたを語っているのである。決して人間の無常な存在としての面を思慮外においているのではないはずである。必ず死を迎える存在であることを承知しつつ、その生のすがたを暖かくみづめ、明るくおおらかに肯定的に語っているのである。すなわち、確かにその意図・内容・方法等においては大きな異なりがある『平家物語』と『宇治拾遺物語』ではあるが、両者に共通する人間への暖かな眼差し裏には、必ず死を迎えざるをえない無常の存在として人間を捉える共通の基盤があるのではないかと考えるのである。

これまた、『宇治拾遺物語』がその無常観を真正面から具体的に語つてはいないという壁に阻まれて、推測の域

を出ないものである。今は、『宇治拾遺物語』が、人間への暖かい眼差しという一点において、『平家物語』と共通しているということを確認するのみである。

## 結

以上、『宇治拾遺物語』の人間観について考察し、さらに、『徒然草』および『平家物語』の人間観と比較をした。すなわち、『宇治拾遺物語』は、人間のありのままのすがたに、時には驚き、時には感嘆し、時には苦笑しつつ、しかし決して非難したり批判したりすることなく、人間をおおらかにみつめ、これが人間なのだ人間のをすべてを認め、肯定しているのである。このような『宇治拾遺物語』の人間観は、『徒然草』の、矛盾に満ちた人間性を認め、その人間性を肯定する立場に立って、「ひたふる」でない、精神的に自由な生き方を求めた考え方と非常に似通っており、また『平家物語』は、無常の「ことほり」の前にまったく為す術もなく滅んでいった数限りない人間への暖かい同情・共感をもって語るが、その人間への暖かい眼差しという一点において、『宇治拾遺物語』の人間観は共通しているのである。そして『徒然草』も『平家物語』も、その人間観は無常観を基盤として成り立っているものであった。

言わずもがなのことであるが、中世は前述したような時代であった。そのような背景を持つ中世文学も濃淡の差こそあれ、無常観を根底に持っている。そしてそれらの文学作品は、その無常観の上に立った人間観を持っている

のである。『徒然草』や『平家物語』は前述した通りであるが、『方丈記』や謡曲なども顕著な例であり、仏教説話集も然りである。しかし、本来的に言えば、無常の存在として人間を捉える場合、それは現世否定へと至り、その人間観は否定的なものとならざるをえない。ところが、中世文学は、人間を肯定的に捉えているものが意外と多い。私見によれば、積極的・消極的の違いはあるものの、西行も、『方丈記』も、『建礼門院右京大夫集』も、『とはずがたり』も、謡曲も、その他多くの作品が、人間を肯定的に捉えていると思われる。

つまり、中世文学の人間観は、無常観に立って人間を無常の存在と捉えた上で、その人間の存在を肯定的に捉えていると言いうるのではないかと考えている。そして、この点が明らかにできるならば、『宇治拾遺物語』の人間観についてもその基盤の一端を明らかにできるのではないかと思うが、この点についてのさらなる考察は別の機会に譲ることとする。

#### 注

- (1) 『宇治拾遺物語』は、新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』（岩波書店）をテキストとする。
- (2) 多くに用いられている「编者」という語を用いず「作者」とするのは、例え多くの出典から話を採録しただけであったとしても、そこには採録の適否、話の配列等において编者の意図が働いているのであり、それはとりもなおさず、一つの作品を作りあげていることになると考えらるからである。旧日本古典文学大系本（岩波書店）の「解説」でも「编者は、自分のことばで批評や感想をのべたり、意見を主張したりすることはすくなかったが、ここに集められた一九七篇の説話を、このような表現で集め語ったところに、彼自らを語ったものだといってよい。」（二五頁）と述べられている。

(3) 繁雑になるが、一部を列挙する。ばくち打ちに騙されながらも地藏菩薩に会い極楽往生を遂げた、信じて疑わない尼とその願いが叶う不思議さを語る話(第二六話)、百鬼夜行に出会い一瞬にしてはるか遠い地へ行ってしまったという不思議な話(第一七話、百鬼夜行に出会う話は第一六〇話にもある)、地方豪族の豪勢な暮らしぶりとそれに比して貧相な五位の姿、また一言言ったばかりに思いもなかった長旅をする羽目になった五位、それに狐の不思議さも加わった話(第一八話)、清徳聖はとてつもない大食漢であったが、実はその後ろに一般の人には見えない餓鬼・畜生や鳥獸がついていて、それらが食べていたという不思議さ、さらにそのような清徳聖の行為の貴さを語る話(第一九話)、雨を降らせた静観僧正の験力のすばらしさを語る話(第二〇話)、同じ静観僧正の岩を祈り砕いた験力のすばらしさを語る話(第二一話)、鯛の荒巻をめぐる紀用経の失敗を語りつつ、人々の食物への人間らしい執着や思いを語る話(第二三話)、長い鼻を持った禅珍内供の、立派な僧でありながら、その鼻に悩むすがたを好意的に語る話(第二五話)、妻が浮気をしていると邪推してもう少しのところで他人を殺す羽目になりそうなほどに逆上した男と、すんでのところで殺されずにすんだ明衡の話(第二九話)、柿の木に仏が現れたことによって大騒ぎをする人々と、それが糞高の化けたものだと見破った右大臣の話(第三二話)、相手の美女が放屁したことによって出家しようとしたが馬鹿らしくなって思い止どまった藤大納言忠家の話(第三四話)、鳥羽僧正覚猷のおかしな習慣と、その僧正にさんざん待たされた国俊が仕返しを遂げる話(第三七話)、熱田神宮の大宮司が国司となって下ってきた俊綱にひどい目にあわされ、熱田の神に祈ったが、実は前世の因縁から仕返しをされたのだからどうにもならないという夢告を受けたという話(第四六話)、雀が恩返しをするという不思議さと、対照的な二人のお婆さん、さらにはその周囲の人々の人間らしいすがたを語る話(第四八話)、人を恨めしく思ったために蛇身に生まれ変わったという女が、蛇身から救われたことを感謝し報恩しようとする不思議な話(第五七話)、一生不犯の清僧が八十歳にして進命婦に恋慕したという話だが、作者はその破戒について非難めいたことは語っていない話(第六〇話)、一度死んだ業遠が祈祷によって蘇生し用事を言った後また死んだ不思議なことと、業遠を蘇生させた観修僧正の験力のすばらしさを語る話(第六一話)、僧に作ってもらった仮名曆に忠実に従い、挙句に粗相をしてしまった女の話(第七六話)、自分の出生の曖昧さを証人によって払拭しようとしたが、かえって恥をかく羽目になった男の話(第七七話)、ともに生き仏と称された隆明と増誓の、一方は極めてつつましい

生活をし、一方は豪奢な生活をしたことを語り、増誉の男色をも併せて語るが、決してそれを批判することなく、それぞれの生き方を認めている話(第七八話)、盗み食いた水魚が鼻から出てきて露見したが、平然と言いつくした僧の話(第七九話)、若く美しい尼の死体が風と共に消えてしまった不思議な話(第八四話)、鷹を取ろうとして谷底に落ちた男が観音の化身である蛇の背に乗って助かったという不思議な話(第八七話)、いつも飛んでいって食物を運んでいった鉢が、空を飛んで倉を運びまた米俵をも運んだということ、また醍醐帝の病気を直すのに護法童子を遣わしたという「まうれん小院」の不思議な話(第一〇一話)、仏師を欺いて何の礼も払わず仏像を造らせ、講師をもだまして礼もなしに開眼供養をさせた、「くうすけ」という法師の話(第一〇九話)、せっかく仏像を造ったのどういふ仏なのかについては願主も仏師も知らず、またそのことにこだわっていないという「つねまさ」の郎等「まさゆき」の話(第一〇話)、三人組の盗賊をかううじて討ち果たすことができた則光が翌日誘われてしぶしぶ現場へ行ってみると、ある男が凶々しくも自分が盗賊を退治したとまくしたてていたという話(第一三三話)、入水往生すると言って多くの観衆を集めておきながら最初からその気がなく、弟子の僧に助けてもらって観衆からさんざんな目にあわされた聖は、後に手紙に「前の入水の上人」と書いたという話(第一三三話)、五十年余りも穀断ちをしているという上人が、その排泄物から嘘であることが露見してしまい、「穀糞の聖」と大笑いされたという話(第一四五話)、助けられた亀が人に化けて銭を返しに来たという不思議な話(第一六四話)、賊に人質に取られたが、その人並みはずれた怪力ぶりで賊を恐れおのかせたという大井光遠の妹の話(第一六六話)、娘が羊に転生しているのを知らずに、その羊を料理させてしまったという唐の「けいそく」の話(第一六七話)、父が転生した鯨であるのを知りつつ、それを食べて骨が喉にささって死んだ出雲寺の別当上寛の話(第一六八話)、三川入道寂昭が唐の王の前で験力を試された時、神仏に祈って鉢を飛ばすことができたという話(第一七二話)、水瓶を飛ばす験力を持った清滝川の聖は、同じように水瓶を飛ばす僧を試そうと火界呪を誦して加持したが逆にひどい目にあつたという話(第一七三話)、盗人の尻をボンと蹴つたらそのまま見えなくなつてしまったという遍照寺僧正寛朝の怪力の話(第一七六話)、六十人力ほどの大蛇に足を引っ張られながらもその身を断ち切つてしまったほどの怪力の持ち主である経頼という相撲取りの話(第一七七話)等々、それこそ枚挙にいとまがない。しかも、これらの話に登場する人間について、立派な人物や真面目な人物に対しては素直に感嘆したり褒め

たりし、人の道にはずれるような行爲をした人物や卑猥な言動をした人物に対しても、それも人間のすがたなのだという観点から肯定的に捉え、明るくおおらかに語っているのである。

- (4) 拙稿「粟を食ふ娘」の話―『徒然草』第四十段の解釈をめぐって―(『同朋大学論叢』第四十四・四十五合併号所収・昭和五十六年六月) 参照。

- (5) 『徒然草』は岩波文庫本(西尾実氏校注)をテキストとする。

- (6) 拙稿『平家物語』の世界―男性群像をめぐって―(『同朋大学論叢』第四十七号所収・昭和五十七年十二月)、「覚一本『平家物語』の性格―「あはれ」の語の考察を通して―(『同朋国文』第十七号所収・昭和五十九年三月)、「死への想い―『平家物語』の語るもの―(『同朋大学論叢』第六十二号所収・一九九〇年六月) 参照。

- (7) 『平家物語』は、覚一本系統の一本である龍谷大学本を底本とする、岩波古典文学大系本をテキストとする。

- (8) 「有ハ本ヨリ無シ 因縁諸ヲ成ズ 盛ナルハ必ズ衰へ 実ナルハ必ズ虚シ 衆生蠢々トシテ 都テ幻居ノ如シ」(原文)